
CAR LOVE LETTER 「Catch the Wave」

YAS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C A R L O V E L E T T E R 「C a t c h t h e W a
v e」

【Nコード】

N 9 7 6 9 H

【作者名】

Y A S

【あらすじ】

主人公のもとに、突然大きな荷物が届く。贈り主とは・・・？
テーマ車種：ホンダストリーム（RN3）

（前書き）

車と人が織り成すストーリー。車は工業製品だけれども、ただの機械ではない。

貴方も、そんな感覚を持ったことはありませんか？

そんな感覚を「CAR LOVE LETTER」と呼び、短編で綴りたいと思います。

<Theme: HONDA STREAM (RN3)>

俺は今、海にいる。もうすぐ夕方が迫って来そうな水平線を眺め、サーフボードを傍らに、砂浜に腰をおろしている。

ひと月前位の土曜日の朝っぱら、えらくでかい荷物が届いたんだ。送り主は全っ然知らない人で、しかも外国からの荷物だった。

この荷物、映画とかでよくある爆弾だとか麻薬だとか、死体だったりして?!と、そんな物が海外から送られて来るなんてあり得ないとかわかってるのだが、俺はそんな変な心配をして、恐る恐る梱包を開けた。

荷物は段ボールとテープの適当な梱包で、よくこれで海外から来たもんだと、逆に感心させられた。

案の定、梱包はいとも簡単に開かれ、中にはプチプチでこれまた適当に巻かれた、真っ黄色のサーフボードが入っていた。

「なんだこりゃ。」俺は思わず独り言を呟く。

サーフボードなんか買った記憶は無いし、ましてやこれは、かなり使い込まれた中古品だぞ。この送り主、一体どういつもりなんだ？俺は荷物の中を詳しく探してみると、中にこれまた適当な、破ったノートの手紙が入っていた。

青いボールペンで、汚い文字で書かれた手紙。どうやら英語のようだ。俺は学生の頃にはほとんど使わなかった、ほぼ新品の英和辞書を引っ張り出し、手紙の解読にチャレンジした。

読み進めると、ある人物の名前があった。あいつか。なるほど、この外国人はあいつの知り合いなんだな。

あいつとはずいぶん仲良くしてて、ルームメイトでもあったらしいな。

そして、あいつに何かあった時には、このサーフボードを俺に送る様にいつも言っていたと。

何かあった時って、じゃあ何かあったって事か？！

俺はサクサク読み進められない、英語と汚い文字の手紙がもどかしくて仕方がなかった。

あいつは俺の7歳年下の会社の後輩だった。

顔立ちはジャニーズ系でかわいい感じで、小柄で華奢な感じだけど、真っ黒に日焼けしてて、いかにもスポーツが得意そうな感じだった。そんなだから、あいつは会社の女の子連中からいつもチャヤホヤされていたんだけど、それを全く気にする事はしなかった。

実際変わったやつだよ。

新人で入って来た時の歓迎会で、入社の動機を聞いてみたら、「海が近いからです。」なんて言ってたんだ。

そう、あいつはサーフィンが大好きで、毎日サーフィンがしたいから、会社帰りにすぐ行ける様になって、うちの会社に決めたんだって。よく人事は採用したもんだ？！

あいつは5歳の時から父親の影響でサーフィンを始めたらしく、若いけどキャリアは13年とベテランだ。地元でもかなり有名だったらしく、大会なんかでも最年少優勝したりして、サーフィンやってるやつの間ではちょっと名の知れた存在だったそうだ。

俺は全くサーフィンに興味がなかったんだけど、ある日の会社帰りに、偶然あいつがサーフィンやっているとところを見る事があったんだ。すごいんだよ。全く興味の無いド素人の俺が見ても、すごいと分かる。あいつの波乗りは、見る者を圧倒するんだよ。とにかくカッコいいんだ。俺はしばらくあいつが波に乗る様子をただただ見つめるばかりだった。

しばらくしてあいつが戻って来て、恥ずかしそうに「先輩じゃないですか。嫌だな、見てたんですか。」と、あれだけ堂々と波乗りをしてたやつとは思えない、まるで中学生の女の子みたいにはにかみやがったのさ。

何だか俺はあいつの話が聞きたくなって、あいつを飯に誘ったんだ。あいつは二つ返事で「まじっすか！ゴチになります！」と俺の奢り前提で頭を下げて来たんだが、「でも、今かなりいい波が来てるんです。もう少し待ってもらっていいですか？」と、俺の返事を待たず、また海に向かって走って行った。

結局それから1時間ほど波に乗って、「今日はこんな感じで。」と帰り支度を始めた。

ファンだと言う女の子二人があいつに駆け寄って来てさ、これから一緒にご飯でも、なんて言ってた。ここらでも有名なんだな。あいつは。

「悪いけど、今日はこれから先輩とデートなんでね。」とあいつは俺を見る。

すると女の子達は、何あいつって顔して俺を睨んで行ってしまった。

何か損な役回りじゃないか？俺・・・。

あいつのサーフボードを、俺のストリームに積めるかトライしてみた。

上手い具合にギリギリ載せる事が出来た。

俺は釣りとキャンプと山登りが趣味だったから、荷物が積めるストリームみたいなミニバンが重宝するんだ。

しかし山の趣味メインのこの車に、まさかサーフボードを載せるだなんて、夢にも思わなかったよ。

「まさにサーファースイズの車ですね！」なんてあいつも言ってた。

その晩は焼き肉を突っつきながら、あいつの熱のこもったサーフィンの話を聞かせてもらった。

親父さんはプロサーファーだった事、その親父さんの親とは思えない程の、しごととも言える過酷な練習や、初めて波に乗れた時の事、そしてこれからの夢の事。

その話はホント面白かった。19ハタチの若いやつ語るチャラチヤラした内容じゃなかった。おかげで何杯ジョッキを空けた事か？しかしあの時あいつは未成年だった様な、違う様な・・・？

あいつの話に感化されて、俺もサーフィンに興味を持った。あいつに師事をあおいで、ついにサーフィンを始める事にしたんだ。

まずはあいつに板を借りてやり始めたんだ。

でも思う様には行かなくてね。ちっとも波に乗れないのさ。

結構スポーツは得意な方だと自負してたんだが、だから俺は恥ずかしくって。

でもあいつはそんな俺をけなす事なく、「最初はそんなもんですよ。さ、頑張りましょ！」って、励ましてくれた。その時の表情はホン

トに優しい笑顔だった。今もはっきりと覚えているよ。

またあいつのアドバイスは的確なんだ。素人の俺にも分かり易くて、二回目に行った時にはもう波に乗れる様になったんだ。

波に乗る感覚がホントに気持ち良くて、俺は完全にサーフィンにはまってしまったんだ。そして、自分のサーフボードを買う事にしたんだ。

あいつを驚かそうと思って、あいつには内緒で板を買いに行った。店員の勧めと見栄も働いて、ちよつと高めの板にしたんだ。

次の週末、その板を俺は誇らしげにストリームから引つ張り出した。「あゝ、すげえ！これ結構したでしょ。」とあいつは驚く。これが社会人の瞬発力だぜ、若人よ！

「でも、こんなにいい板じゃなくなつて、波乗りは楽しいですよ！」と俺の鼻っ柱を軽くへし折り、あいつは波に向かって行った。くっそ〜！

その頃から、俺達は毎週のようにサーフィンに行ったんだ。先生もいいし、流石に俺も上達したよ。

そんなサーフィン三昧の週末に、一度だけ俺は、あいつを釣りに付き合わせた事がある。

やっぱりサーフィンがやりたかったあいつは「いい波来そうですね。なんて言つて、釣り糸を垂らしながら、心ここにあらずだった。けれどもあいつ、適当に釣竿を揺すっていたら、ビギナーズラックでクロダイなんて釣り上げやがってさ、「意外と釣りも悪くないですね！」なんて坊主の俺を大笑いしてたのさ。

ホント、あいつは海の神様に愛されていたんじゃないかな。

しかしそんな俺達の週末も、そう長くは続かなかった。
というのも、あいつの夢だ。

あいつは本場ハワイで、日本人サーファーとして名を馳せたいと思
っていたんだ。

ハワイで暮らして、毎日サーフィンに明け暮れて、そして伝説のビ
ッグウェーブに乗るんだとさ。

その夢を、まさに実現しようとしていた。

2年勤めてやっと仕事も覚えてきた頃だし、得意先からのあいつの
評判もよかったから、上司もずいぶん説得しようとしてたんだ。

でもそんな上司の言葉を振りきって、あいつは夢に向かってまい進
したんだ。

そしてあいつは、会社を辞めてった。

上司は「風のように現れて、風のように去っていったな。」と、残
念そうな顔をして、あいつの門出を見送った。

あいつが会社を辞めて2週間位したころかな、朝あいつから突然電
話が来たんだ。

「今日絶対いい波来ますよ。行きましょ！」

おいおい、俺はこれから仕事だぞ。馬鹿言わないでくれよ。

迷惑だと思っ反面、会社を辞めてからも、あいつが俺を誘ってくれ
たのが嬉しかった。

「今日先輩が居なくても会社潰れないでしょ。波は、今日しか来ま
せんよ！」

俺はあいつのその言葉で、ジャケットとネクタイを放り投げ、会社にダミ声で電話したんだ。

そしてストリームに、板と、あいつと、ちょっとだけの罪悪感に乗せて、俺達は海に突っ走った。

あいつの言う通り、その日はホントにいい波が来ていたんだ。

多分あいつの前で、今までで一番の波乗りを披露出来たと思う。

「大分上手くなりましたよね！」って、普段褒める事なんてしないやつなのに、あいつは珍しくそう言ってくれた。

ひとしきり波に乗った後、誰も居ない平日の砂浜でコンビニのオニギリを食いながら、「明日、行きます。」とあいつが切り出してきた。

そっか。行く前にいい波に乗れてよかったよな、と俺が言うと、「あっちじゃこれくらいの波、日常茶飯事ですよ！」と言ってきたのさ。

「本場でいろいろ技を仕込んで来るんで、先輩も鈍らない様に練習しといて下さいよ？」なんて憎たらしい笑顔と一緒にね。

あれから4年。

一度だけ手紙が来たつきりで、あいつとは全く音信不通だった。

そして今、俺のところに、あいつのサーフボードと、あいつの仲間の手紙が届いたんだ。

手紙では、やはりあいつはハワイでもかなりの有名人になった様だ。マジックモンキーってあだ名で、いろんな大会で賞を総なめにしたそうだ。

だが、10年に一度と言われる波に挑んで、その後あいつに会った

やつは居ないそうさ。

砂浜には、あいつが愛用していたサーフボードだけが残されていたらしい。

手紙はこう締めくくられていた。

「俺達は、マジックモンキーが死んだなんて思っちゃいない。あいつはきっと、更なるビッグウェーブを求めて、違う国に行ったのさ。きっとそのうち、小さな黄色い猿の噂がどこかの国から聞こえて来るぜ。お前もすっかり耳を澄まして待っている事だ。」

もうすぐ日が沈む。

あいつのサーフボードは、本当によく波を捕えた。乗りやすく、粘り強く。

しかしあいつのサーフボードは、俺の使っている板よりもホントに安い、入門用に毛が生えた程度のもだった。

これであいつは本場の目の肥えた奴らに、マジックモンキーと言わしめたんだ。

俺は、背筋に武者震いを感じた。

俺が帰り支度をしていると、若いサーファーが俺に声をかけてきた。

「すごい波乗りでしたね。板も、かなりすごいですか？」

「ああ、最高の板だよ。俺は、マジックモンキーって呼んでる。」

入門用の板を見て、若いサーファーは不思議そうな顔をした。

俺はマジックモンキーをストリームに滑り込ませ、家路を走る。ストリームの窓越しに見える暮れなずむ空に、あいつの気配を少し

だけ感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9769h/>

CAR LOVE LETTER 「Catch the Wave」

2010年12月5日14時34分発行